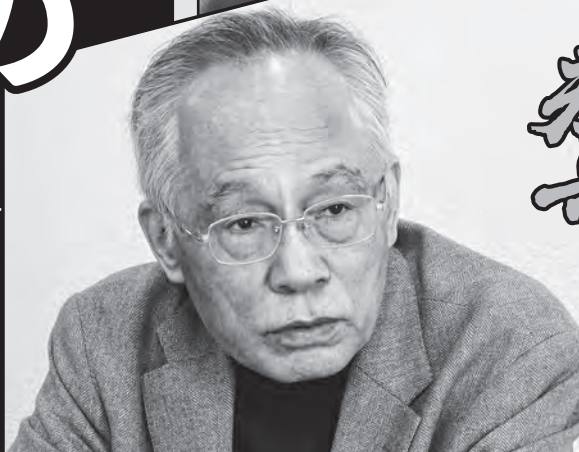


元外務審議官

田中 均

戦争は外交の失敗、ウクライナ問題で問われる日本の役割

佐高信の



賛否
両論

佐高 田中さんはどのようなきっかけで外交官を志したのですか？

田中 私は京都出身なのですが、京都の人間はひねくれているというか反権力なんですよね（笑）。「権力が100%正しいと受け止めるのは間違い」という感覚で育ってきたのが素地にあります。一番は父の影響です。私は戦後生まれですが、父は戦前、商社で働いていて、ペルーでパイ容疑で捕まりました。でも、父はスパイ活動をしていたわけではなくて、当時アメリカは自国の捕虜と交換するために日本人を色々な国で捕まえていました。そんな時代背景もあり、ペルー当局に捕まった後にアメリカの強制収容所まで連れて行かれました。サンフランシスコのアルカトラズ島で尋問を受け、テキサスの収容所に入れられました。捕虜交換で日本に帰国後に今度は赤紙で招集されました。戦争末期だったので、すぐに戻ってきましたが、父の中に国に運命を左右されたという思いが色濃く残ったらしく、「運命を左右されるのではなく、運命を左右する側になれ」とよく言われました。

佐高 壮絶な体験ですね。

田中 戦争は一定のシナリオで組み立てられていて、アメリカはいろんなことを考えていました。その当時は日本人を捕提しようというプロジェクトがあったんじゃないですかね。将来の捕虜交換のために。そういう目に遭った人はたくさんいたみたいですよ。

佐高 そういうことはあまり知られていないですね。

田中 シベリアの収容所にいた人とは違い、テキサスの収容所に一緒にいた人は、ほとんどみんな無事に帰国できたみたいです。

佐高 今日から日経新聞で陸奥宗光を主人公にした小説の連載が始まるんですけど、日露戦争後の「日比谷焼き討ち事件」なんかこわいですよね。

田中 私自身もこわい体験をしなかったわけではないんですけど、権力だけではなく、世論なるものが、政治に利用されて、世論のために政治をするようになってしまふ。陸奥宗光のケースは、本来ならもっといい条件で講和を結べるはずという世論の高まりでしたが、そうならなかった。私自身、北朝鮮と交渉して

いましたが、相手の利益、どんな歴史的背景があるかなど、それらすべてを国民に説明できるわけではないです。その説明をするのが政治であり、メディアです。政治とメディアが一定の方向に走り出したとき、大きな力になり、抗えない。これは陸奥宗光の時からずっとそうだと思います。政治の在り方として、世論に乗っかるか、世論を抑えるかという重要な節目になるところがある。多くの場合、残念ながら政権を維持するために世論に乗っかり、人気をとることに逃げてしまいます。でも、それは政治ではないと思います。政治は正しい選択をするために世論を抑える局面が必要です。今はそれがないように見えます。

佐高 田中さんの外交官人生で印象に残る政治家はいますか？

田中 小渕恵三元首相は立派な人だと思います。小渕さんは人間味溢れる方でした。

佐高 田中さんに着目すると、北朝鮮というみんなが得体のしれない国と関わるところと、ちゃんと交渉しようとした印象があります。親しい国よりも、そうでない国と関係

を築こうとするのが外交ですよ。

田中 国というのは長い歴史の中で存在し、歴史は繰り返す。それは、国と国との関係は自国の利益が前提にあるためです。日本の歴史から考えると、朝鮮半島は豊臣秀吉以降の日本の野心だった。今でもまさに外交で一番大事なのは、地政学的な部分からだまっていたら戦争してしまう国々と平和を保っていくことです。それがいつの間にか「あの国はけしからん」みたいな雰囲気を感じている状況が散見されます。日本経済が右肩上がりの時はアメリカと同盟関係を持ち、西側として国際的な貢献をするという枠組みでした。冷戦が終わると、西側というよりアメリカの一極体制の時代にどう振舞うか考えることが求められるようになった。90年の頃は「NOと言える日本」で、ある程度は依存から脱しようという動きがありました。ところが、中国が力を持つようになり、日本が自国だけでは対峙できないと考え、アメリカへの依存が増えてきました。今やアメリカ依存がすぎると指摘する人もなくなりました。いわゆる日本の思想で右派と言えば、



反米になりましたが、今は反中、
反韓が主流のように見えます。

佐高 石橋湛山や田中角栄は保守の
中でアメリカ依存ではない方向を考
えていましたよね。それは完全にな
くなりましたか？

田中 なくなりましたね。ブッシュ
Jr.政権はイランやイラクをテロ組織
を支援する悪の国だとし、止めるた
めに攻撃するしかないとして、実際
イラクを攻めた。そして、アメリカ
から見ると北朝鮮も敵なわけです。

そういう国と首脳会談をするなん
て、アメリカにしてみれば言語道断
と言う事でしょう。私は個々の人間
関係でもお互いが成長していく人間

関係は、どちらかが言い
なりになるのではなく、
お互いを認め合う関係
じゃないかと思うんで
す。それは国レベルでも
同じで、お互いが自立し、
強さをテコにして成長し
ていかないと将来に禍根
を残すことになる。北朝
鮮訪問の裏の意図は日本
の外交としてできること
をしてアメリカに認めさ

せるということでした。昔の話です
が、アメリカの国務省に呼ばれて、
アメリカがすることに同調してくれ
という話を何回も聞かれました。
でも、小泉純一郎元首相の北朝鮮訪
問は違った。アメリカの関係者を呼
んで説明し、日本がイニシアティブ
をとりました。

佐高 それはかなり固まってからで
したか？

田中 はい。アメリカが反対するか
らやめるという話ではなく、アメリ
カをいかに説得するかという思いで
進めました。日米関係で日本がテコ
を使うということは、アメリカがで
きないことをやる事を意味します。

要するにアジアの国との関係です。

冷戦後、アメリカの力が増すにつれ
て、アジアとの関係が薄れていきま
した。アメリカとの関係を良好にす
るためにも、アジアとの関係を強く
するべきと考えます。今の政治家の
海外出張を見てみると、アジアの優
先度は低い。欧州やアメリカばかり
です。かつて日本がG7に参加する
ときは、アジアの意見を取りまとめ
て代弁しようとしていました。今は
まったくそれが見られない。外交の
本流はアメリカだという認識になっ
てしまっています。

佐高 田中さんにとって小泉元首相
はいい「役者」でしたか？

田中 いい「役者」だと思います。

外交官は在外から情報を集め、世界
で何が起きているか知り、専門家
としての意識を固めていきます。そ
れを政治家へ説明し、判断を仰ぐと
いうのがプロセスでした。私は色々
な総理大臣に仕えてきましたが、中
曽根康弘元首相は自分の座標軸を
持っている政治家でした。彼は日本
をどこへ導けばいいか強い自意識を
持つてやっていました。小泉さんに
もその自意識を感じました。自分た

ちが強くなるためにはどうすればい
いか常に考えているようでした。彼
は国境のない国と交渉することにつ
いていささかの躊躇もありませんで
した。

佐高 躊躇がない？

田中 はい。結果を作れるという前
提に基づいて動いていました。彼を
パフォーマンズだけの人だと言う人
も多いです。ですが、空のパフォー
マンズはしたくない。彼は結果をつ
くるパフォーマンズをしたいたいと思
っていました。外交はきちんとした計
算のもと、総理大臣の直感だけでや
るのは間違いだと思いますが、座標
軸がしっかりした方なので、優れた
「役者」です。かつ修羅場に強い人
でした。

佐高 首相になるはずでなかった人
でしたからね。

田中 そうそう（笑）。横須賀の変
人と呼ばれてね。

佐高 小泉氏の歴史観とかはどうで
すか？

田中 小泉さんの思想や歴史に対す
る意識は決して右翼ではなく、素直
な歴史観を持っています。ただ、あ
る意味で天皇崇拜者です。「天皇を



崇拜することで右翼に狙われないんだ」と言っていましたね(笑)。私が局長になった直後に小泉さんは靖国へ行っただけです。それで日中関係が滅茶苦茶になった。その関係を修復するのが私の最初の仕事になりました。関係を修復するには総理大臣自らが必要と歴史認識を述べると言うことしかなかった。だから小泉さんは中国の盧溝橋記念館へ行きました。勿論何度も打ち合わせはしましたが、私は内心どんな発言をするか気が気じゃなかった。局長になった直

後で、まだその人となりがわからなかったんです。でも、その心配とは裏腹に見事でした。この人は付け焼きた刃でやっているわけではないと感じました。自らの言葉と意識で歴史を語る姿に心を打たれました。そして、自分の意識で物事を判断できるようにしないと政治家にはなっていないと思いますね。『役者』としては素晴らしい人でした。これは私の主観ですけど、彼は何ができたか、あるいは何ができなかったとか、過去に自分がやったことにまったく関心がないんです。今やることにだけ関心がある。

佐高 今、日本の中国に対する雰囲気が悪いです。政治家が勝手に発言して、その後始末を外交官がしているように見えます。その辺はどのようにお考えですか？

田中 こういう言い方をすると語弊があるかもしれませんが、やっぱり日本人は中国人に



対し、どこかで差別意識があるのかもしれない。日中国交正常化によって、中国が日本の最大の援助対象になりました。その時は反中の意識はなかった。しかし、政治家含め、中国が経済的に強くなっていくにつれて意識は変わっていった。援助の対象だった国が豊かになり、釈然としないと感じる人が増えていった。普通の国と国との関係みたいにお互いを配慮するというのを忘れてしまったんです。2010年に中国がGDPで日本を抜いたことが決定的

でした。外交官は歴史に学び、客観的にものを言うことが求められます。感情的な議論で物事を決めていくようなことがあってはいけません。最も大事なことは政治家がそうではないときにいかに説得するかです。ところが、今はそれができなくなりました。第二次安倍晋三政権以降の自民党は人事で官僚を従属させるという道を選びました。歯向かう官僚は飛ばし、逆に忠誠を誓うと重用しました。これによって官僚が客観的な意見を述べるのができなくな

たなか・ひとし——1969年京都大学法学部卒業後、外務省入省。オックスフォード大学政治経済哲学専攻卒業。北米局審議官(96-98)、在サンフランシスコ日本国総領事(98-2000)、経済局長(00-01)、アジア大洋州局長(01-02)を経て、2002年より政務担当外務審議官を務め、2005年8月退官。同年9月より(公財)日本国際交流センターシニア・フェロー、2010年10月に(株)日本総合研究所 国際戦略研究所理事長に就任。2022年12月より国際戦略研究所特別顧問。2006年4月から2018年3月まで東大公共政策大学院客員教授。著書に『見えない戦争』(中公新書ラクレ)、『日本外交の挑戦』(角川新書)、『プロフェッショナルの交渉力』(講談社)、『外交の力』(日本経済新聞出版社)など。



なりました。残念ですが、今後日本が外交で優れた実績を挙げることが難しくなったと思います。

佐高 田中さんがウクライナの外交官だったとしたら、どんな方策をとりますか？

田中 日本の役割は平和をつくることです。平和をつくるために軍事力が必要なきもありません。その軍事力がアメリカでした。アメリカの軍事力が抑止力になっていました。日本はNATOのように軍事協力ができません。G7の首脳がこぞってウクライナのキーウへ行きました。岸

田文雄首相も5月のG7広島サミットを意識してお忍びでウクライナ入りをしました。でも私はモスクワへ行くべきだったと思います。モスクワへ行つてからキーウへ行き、両国の言い分を聞くべきなのです。ロシアは道義に反することをしましたし、それは許されることでは決してありません。言語道断です。罰則を与えるような終わり方をしなければ、今後、世界平和は保てません。しかし、和平のつくり方と戦後処理を混同してはいけません。外交というのは無から有を生む行為です。武

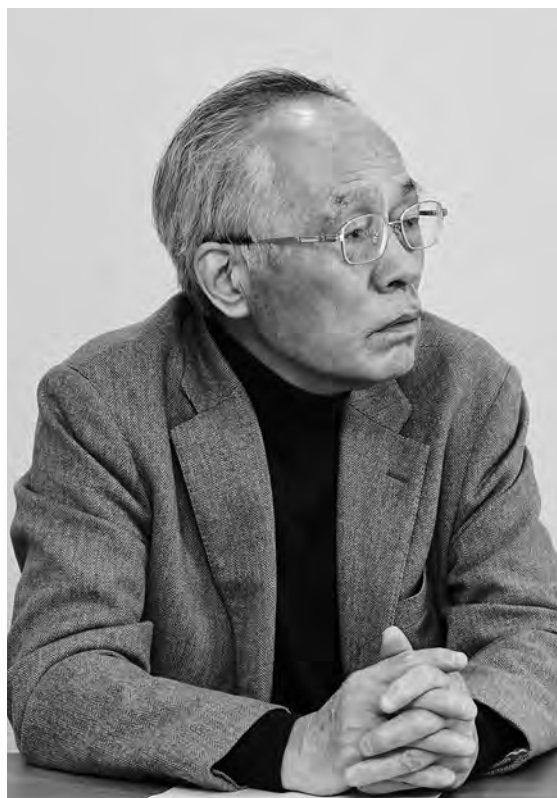
器の支援ができない中でも、平和をつくるという日本だからこそ果たせる役割があります。武器の支援をする国の後ろに隠れて、手をこまねいていては、国際社会での日本の名誉と尊厳は失われます。外交努力で戦争を止める方向を打ち出すべきです。

佐高 北朝鮮のミサイルの問題ですが、米韓の軍事演習の問題でもありますよね？ 単に北朝鮮がミサイルを発射してるつていう形でメディアは報道しているように見えます。一応、北朝鮮にも言い分みたいなものはありますよね？

田中 1年くらい前からウクライナの問題に関連させて、台湾有事を唱える人が出てきました。みんなこぞって「今日のウクライナは明日の台湾」だと喧伝している。それと同時に並行で北朝鮮がミサイルを撃っている。因果関係は米韓合同軍事演習に対する北朝鮮の意思表示です。しかし、ここぞとばかりに政府は防衛予算を飛躍的に拡大させる。そのキャンペーンだと私は考えます。ただ、政治だけでなく、一部メディアもこれに加担しています。リベラル

色が強いと言われた新聞やテレビも軍事専門家と称して、国家公務員であるはずの防衛研究所の職員を連れてきて、「今は軍事だ。外交の道はない」と公の電波で平気で言っています。驚くような変説をするメディアも見受けられます。国会答弁で、岸田首相が防衛費のプライオリティが高いと言っていました。少子化対策や科学技術振興に比べ圧倒的にプライオリティが高いわけではありません。防衛は日米安全保障体制や外交の力などとともに安全保障の一部です。そして、防衛とはいざという時の備えであって、やみくもに防衛費を増やすべきものではありません。海上自衛隊現場トップの自衛艦隊司令官を務めた香田洋二氏は「身の丈を超えている」と警鐘を鳴らしています。防衛費が足りないといえずつと言ってきた現場の人間でさえ、難色を示しています。一方で、子ども予算については、岸田首相は「額ありきではなく、中身を詰めてから」と言っている。私はこのような整合性がない首相の発言がまかり通ることには我慢できません。

佐高 田中さんは『サンデー毎日』



で「戦争は外交の失敗」と仰っていて、その通りだと思いました。

田中 今の世の中の軍事が急に市民権を得たような形で、なんの裏付けもなく、防衛費増額が行われている。以前は、有識者はもちろん、役人も軍事のことを発言する際にはとても慎重だった。今はたいていのことは許されるといった風潮があります。

佐高 それにしてもメディアも節操がないですよ。ね。

田中 メディアの節操がないのは売れるからです。

佐高 戦後、緒方竹虎がせめて朝日と毎日が手を組んでストップをかけていたら変わっていたと言っていました。が、むしろ戦争を煽っていましたね。

田中 そうなんです。完全に煽っていた。今もそうですよね。一番の大きな矛盾は、専守防衛は変えないと言いつつ事実上形骸化していくという点です。

佐高 戦争は外交の失敗であるということは、ずっと伝えていかないといけないですよ。

田中 戦争を止めるには外交の力し



かありません。外交が存在せず、武器供与という形でしか協力できなかった結果、何万人もの人が犠牲になりました。外交がないと戦争は止まりません。しかし、今の日本では

外交が動くべきだと言うと、「ウクライナの人が血を流して戦っている時に何を言っているんだ」と言われる。そんな議論が平気で行われていることは非常に愚かしいです。

撮影＝はぎひさこ